2014年度科目登録説明会

2014年3月14日（金）

13:00-14:30

36号館581教室

担当：宮城徳也（運営主任）

卒業に必要な専門演習の単位

- 卒業のためには自論系（複合文化論系）の専門演習（以下，演習）単位が16単位必要
- ゼミを選択する場合はゼミが8単位とゼミ論が4単位
- 卒業研究を選択する場合は卒業研究が4単位なので，自論系の演習をさらに8単位
- ただし，卒研選択の場合は，8単位を他論系の演習を自論系の演習扱いとして必修単位の算入することができる

卒業に必要な単位と専門演習

- 卒業には合計124単位が必要だが，必修の単位だけでは足りないので，その他の科目群（他論系の演習を含む）から選択，履修
- 自論系の演習は卒業に必要
- 演習のみ１次登録に先立って，0次登録がある（3/17の10:00-3/18の17:00）
- 詳しくは「手引き」を参照し，事務所に問い合わせ
- ★定員35名（昨年まで40名）

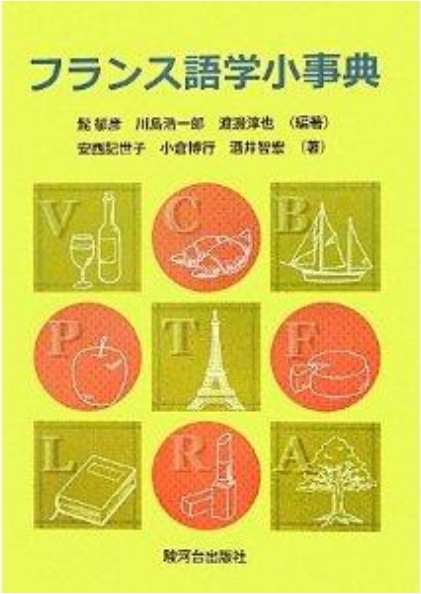
複合文化論系：多様な向学心に応える

- 言語文化プログラム：ヨーロッパ言語／日本語／アジア言語／一般言語学／方言研究／比較言語学／言語理論／言語哲学
- 文化人類学：フィールドワーク／伝統文化／ツーリズム／東南アジア／中南米／開発人類学／都市人類学
- 感性文化：美学／哲学／文学／ヨーロッパ思想／日本の美意識／社会学／組織論／中国の歴史と文化／アジア民俗学
- 異文化接触：異文化コミュニケーション／メディア論／サブカルチャー／現代アート／近代美術／博物館・美術館／異文化受容／ヘレニズム／ルネサンス／儒教文化／東西比較思想

国立美術館キャンパスメンバーズ入会

- 国立美術館キャンパスメンバーズ
- http://www.artmuseums.go.jp/campus/
- 上記の制度を利用して，従来，表象メディア論系と文学部の演劇・映像コース（と対応する大学院のコース）が，国立近代美術館（フィルムセンターも無料）を利用できるメンバーとなっていたが，４月**から複合文化論系も加入**（常設展無料，特別展割引）し，３館利用になる
- 東京国立近代美術館、国立西洋美術館、国立新美術館が利用可能

酒井智宏准教授



- 慶應義塾大学文学部
- 東京大学大学院
- 東京大学博士（学術）
- パリ大学博士（言語学）

言語文化ゼミ
（ことばの科学･ことばの哲学）

- (1) どの言語の、(2) どんな側面を、(3) どんなアプローチで捉えるのか、各自の問題意識を明確に
- どの言語？ ―英語、ドイツ語、フランス語、日本語、英仏語対照、日英語対照、etc. 世界のどの言語を選んでもOK
- どんな側面？ ―統語論、意味論、語用論、社会言語学、統語論と意味論の関係、意味論と語用論の関係、etc. どんな側面を研究してもOK
- どんな側面？ ―統語論、意味論、語用論、社会言語学、統語論と意味論の関係、意味論と語用論の関係、etc. どんな側面を研究してもOK

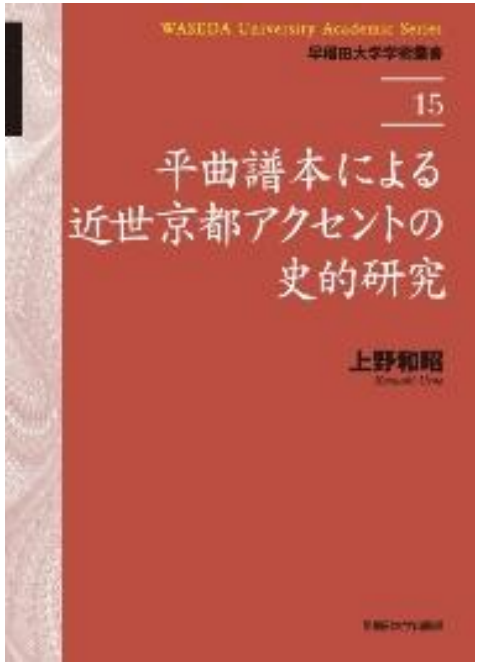
言語文化ゼミ（ことばの歴史・ことばの地理）

- 日本語を対象として「言語の地理、言語の歴史」を中心に研究
- 地域言語調査（言語の地理）と文献資料調査（言語の歴史）
- 言語研究という「主軸」に、文学・社会学・歴史学・哲学などなど、学部の授業などから学べるさまざまな学問を「交差」させて、新たな視点から言語に関連する事象を考察

上野和昭教授

- 著書『平曲譜本による近世京都アクセントの史的研究』（早稲田大学出版部）で新村出賞を受賞
- 同賞は、日本の言語学の草分けであり『広辞苑』の編著者、文化勲章受章者としても知られる故新村出氏の功績を記念するもの

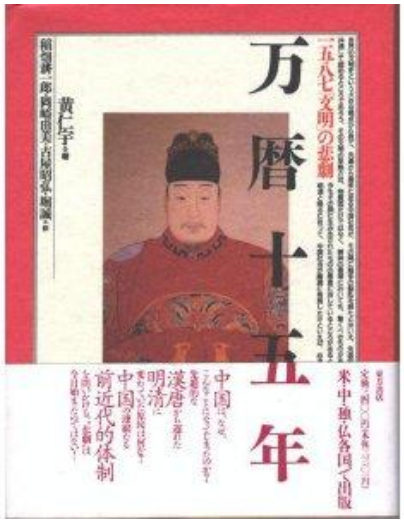
上野和昭教授とゼミの様子，御著書



言語・文化ゼミ
（ことばの表記・ことばの伝達）

- アジアの諸言語の、文字を中心とする表記の現状と歴史
- 音声言語と文字の関係、文字の類型
- ことばの伝達という視点から、書記メディアの素材と形態、書籍の流通、印刷文化など
- 言語学の部門としては文字論や音韻論が中心

2014年から古屋昭弘教授がゼミ開講
（中国語を中心に，アジア言語にご堪能）



文化人類学プログラム

- 時間と空間の枠組みを超えて、人間文化の複合的諸相を統合的視点に立って解明
- フィールドワークが重視され、その構成は理論と実践をつなぐインターフェイスの科目群
- 人類学の知識を実践の場に還元する応用人類学に重点
- ゼミとして「＜伝統＞文化とその変動」,「ジェンダーと文化人類学」,「文化ツーリズム論」が3ゼミがある

文化人類学ゼミ（＜伝統＞文化とその変動）西村正雄教授（副題：下町の文化人類学）

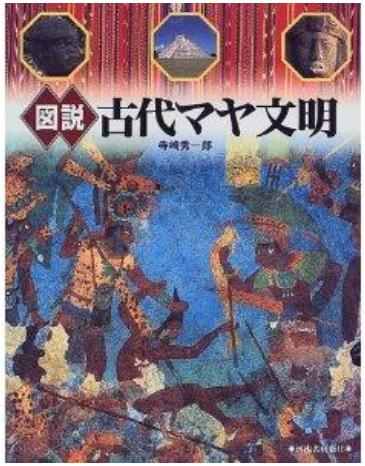
- 3 年生は、クラス内でフィールドワークのやり方、下町とはなにか、下町の描かれた、また地図上での下町の位置などを確認して、実際のフィールド調査
- 下町では祭りやイベントも多く、それらに参加，観察．浅草、日本橋、神田、築地、深川などに赴き、調査
- その結果をクラスにもちより、ディスカッションをとおして、各自関心のあるテーマを絞ってきた

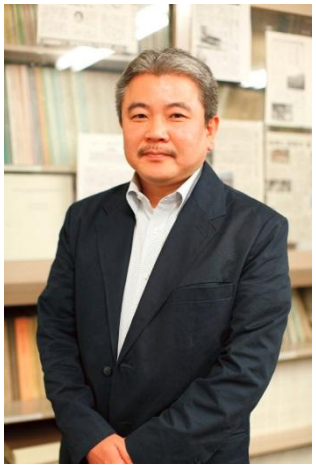
西村教授の授業，シンポジウム風景

文化人類学ゼミ（文化ツーリズム論）
寺崎秀一郎教授

- 文化/文化遺産をめぐる今日的状況、および、「持続可能な開発」としての観光開発の過去と現在を理解するための基本的文献を読破
- 各自のフィールドを選定し、来るべきゼミ論に向けて予備調査を実施
- ツーリズムということを入り口に、文化/文化遺産を継承する人びと＝ホスト側とそこを訪れる観光客＝ゲスト側の双方において、文化はどのように語られ、あるいは再構築されていくのか、あるいは、その未来はどうなるのか、といった問題を起点に人類社会の多様性や多文化共生型社会について、考えていきたい

寺崎秀一郎教授





感性文化プログラム

- 「味わい」、「装い」、「演じ」、「創り」、「愛し」、そして「死を恐れる」という人間の日常の行為と情動を、文化・社会のダイナミズムにおいて論ずる
- 新たな思考と感性の可能性を探求
- 制度化された学問それ自体に対しても批判的であるような新しい学問的視野とその方法を模索
- 文化の未来学を目指すと同時に、教員と学生の共同作業を実践するなかで、文化創造に向けての脱時間的・脱地域的な視野と価値理論を獲得

感性文化ゼミ（芸術／性愛／死）
小林信之教授（副題：感性と哲学的思考のレッスン）

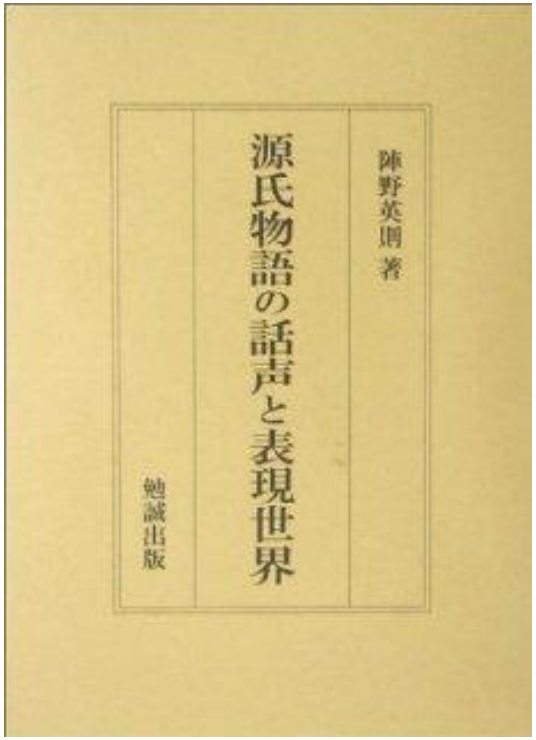
- 生身の身体とともに生き、この世界を他者と共有し、有限な存在であらざるをえないわたしたち自身の有り方を問題
- 感覚と知覚、身体と感情、言語とコミュニケーション、さまざまな生活文化の形態、それらのテーマを哲学的に主題化
- 多様な現象をあくまで具体的に考察（アートと生活世界の美学／性と愛の思想／生と死の哲学）

小林信之教授とゼミの様子

感性文化ゼミ(日本の美意識)
陣野英則教授

- 感性と美意識とを手かがりにして、日本文化の特質についてともに考えてゆく
- 「日本的」あるいは「和風」とみられている諸事象は、本当に日本で生み出されたといえるのだろうか
- 近代以降、西欧の文化（特に言葉・観念・思想など）との接触がもたらしたものを意識
- 日本文化が海外でどのようにみられ、また受容されているのか

陣野英則教授



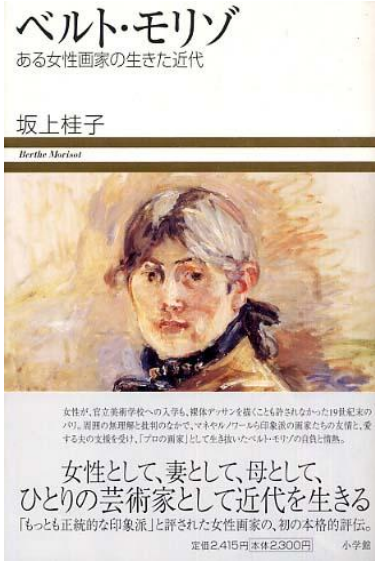
異文化接触プログラム

- 異なる複数の文化体系が接触する場において、どのような現象が生じ、社会・文化のどのような変容が見られるのか
- 過去の異文化接触がいかなる新たな文化の潮流を形成していったか
- 現代世界の諸問題を異文化コミュニケーションの現実として多角的にアプローチ
- 多様化する世界の現在から未来を展望
- アートと異文化コミュニケーション、メディア・コミュニケーション論、文化変容論の３ゼミ

異文化接触ゼミ(アートと異文化コミュニケーション)
坂上桂子教授

- アートを手がかりに異文化接触の問題を考える
- アートはそれ自体、異文化の交流点
- アートは、古くからどの地域においても、異文化と接触することで固有の文化を改変し、新しいものを創造することで、ダイナミックに展開
- アートは、文化間の価値の相違を明確に見出せる場
- 研究テーマ例：美術館、展覧会、アートフェスティバル／外国における日本文化受容、日本における外国文化受容、比較美術史／都市のデザイン、建築文化、パブリックアート

坂上桂子
教授


ベルト・モリゾ
ある女性画家の生きた近代
坂上桂子
Berthe Morisot
女性として、妻として、母として、
ひとりの芸術家として近代を生きる
「もっとも正統的な印象派」と評された女性画家の、初の本格的評伝。
定価2,415円 本体2,300円
小学館

夢と光の画家たち
モデルニテ両者
坂上桂子
スーラ・エッフェル塔
カイユボット・鉄道
ピサロ・広場
ドガ・オペラ座

異文化接触ゼミ（メディア・コミュニケーション論）
高橋利枝教授（副題: グローバル化とデジタルメディア）

- グローバル化、デジタル化された現代社会におけるチャンスとリスクについて理解を深め、コミュニケーション能力を身に付ける
- グローバル化や異文化コミュニケーションに関する文献、またメディアの役割を理解するために、主要な文献の講読やリサーチ→グループにわかれ、文献・リサーチに関するプレゼンテーション
- 2012 年度は、教育分野・EU/各国政府・政策・NPO/NGO 班、広告班、企業・マーケティング班、研究・リサーチ班の 4 グループ

Profile

高橋利枝

Toshie Takahashi

東京大学大学院社会学研究科修士課程修了。東京大学大学院人文社会研究科博士課程単位修得満了。英国ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカルサイエンス大学院博士課程終了Ph.D.取得。現在、早稲田大学文化構想学部准教授。2010年オックスフォード大学客員研究員。2010～2011年ハーバード大学専任研究員。主な著書として"Audience Studies"(Routledge、09)、「デジタル・ネイティヴと日常生活ー若者とSNSに関するエスノグラフィー」(情報通信学会誌、09)他多数。現在、オックスフォード大学、ハーバード大学とともに「若者とメディア」に関する国際比較研究を行なっている。

高橋利枝教授

http://blogs.law.harvard.edu/toshietakahashijp/

Audience Studies: A Japanese Perspective by T. Takahashi
Preface by Sonia Livingstone

異文化接触ゼミ（文化変容論）
宮城徳也（副題:文化変容とその展開）

- 文化が伝播し、それを別の文化が受容することによって新しい文化が生まれていく過程を考察
- 文化が変容し、新しく生成していく過程を過去の偉大な遺産（思想、芸術、言語）から学ぶ
- 異文化が他の文化との接触によって新しい文化を生み出していくことに興味を持つ学生を対象
- 過去のゼミ論のテーマは多様で、ヨーロッパと日本の言語、美術、建築、思想、文学、歴史、食文化、庭園、都市、多文化共生、宗教
- 核になるのは「異文化の伝播、受容、変容」で、その中から新しい文化が形成されていくことに、関心があることを前提

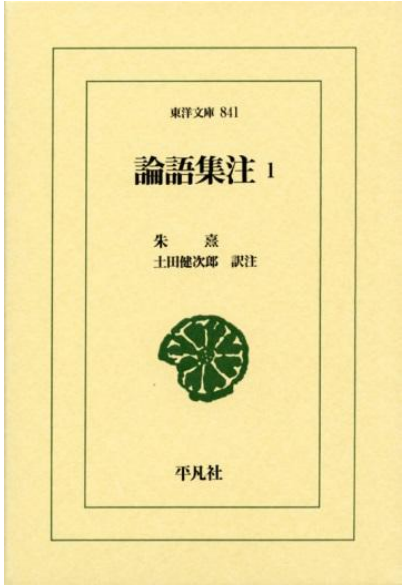
宮城ゼミ合宿，フィレンツェ寓居，シチリア

ΠΑΝΤΕΣ ΑΝΘΡΩΠΟΙ
ΤΟΥ ΕΙΔΕΝΑΙ
ΟΡΕΓΟΝΤΑΙ ΦΥΣΕΙ

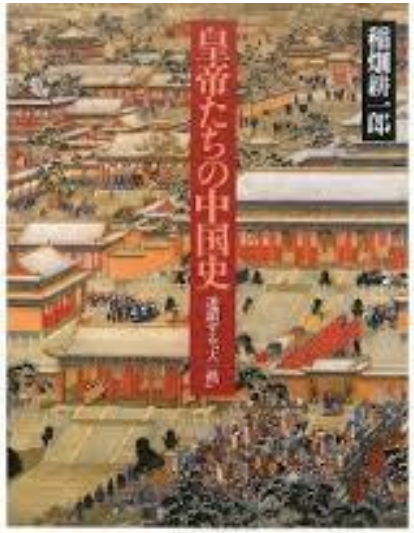
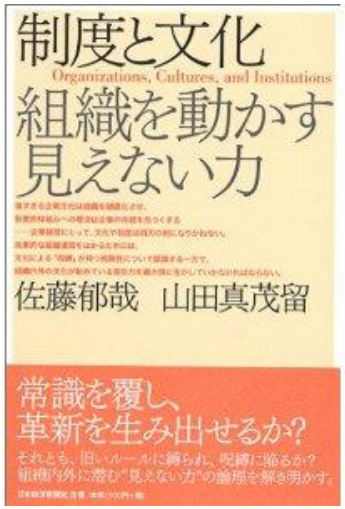
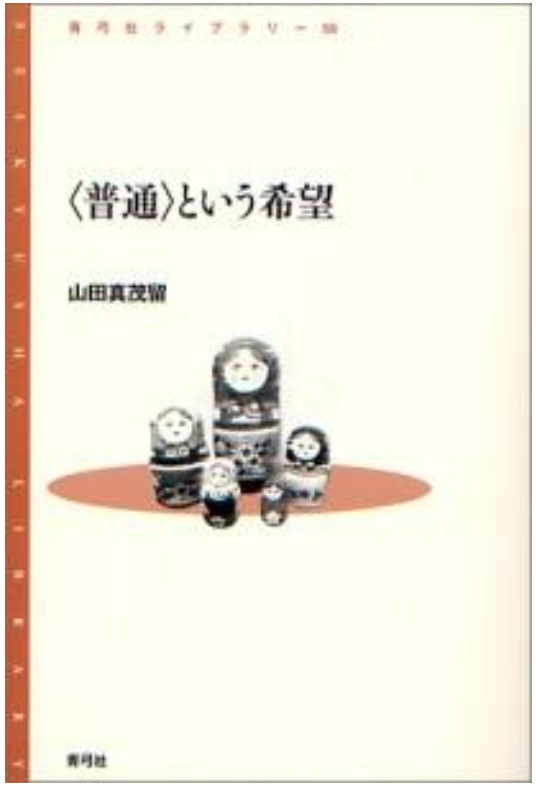
2015年からの新体制

- 異文化接触：坂上桂子（美術史，モダンアート）／高橋利枝（メディア論，異文化コミュニケーション）／土田健次郎（中国思想，朱子学，江戸儒学）／宮城徳也（西洋古典学，ルネサンス研究／文化の伝播，受容，変容）
- 感性文化：稲畑耕一郎（中国古代学／中国とアジアの文学，歴史，民俗，考古）／小林信之（美学，現代哲学）／陣野英則（日本古典文学、平安時代文学、物語文学）／山田真茂留（社会学，組織論，制度論）
- 言語文化：上野和昭（日本語学）／酒井智宏（言語学／ヨーロッパ言語／言語哲学）／古屋昭弘（中国語史，東南アジア諸言語史）
- 文化人類学：西村正雄（文化人類学，民俗学，民族学）／寺崎秀一郎（中南米考古学）／＋1名
- 専任教員14名＋助教（松本弘毅　神話学）＋助手2名＋学生（各学年約160人×３学年）

2015年から移籍予定教員：土田健次郎教授
（中国思想，日本思想，比較思想）



2015年から移籍予定教員：稲畑耕一郎教授
（中国古代学・・現代中国，アジア，民俗，考古も視野）



2015年から移籍予定教員（社会学，組織論，制度論）
山田真茂留教授（秋期「組織と文化」ご担当）